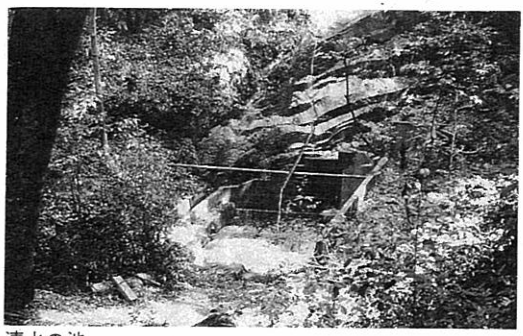
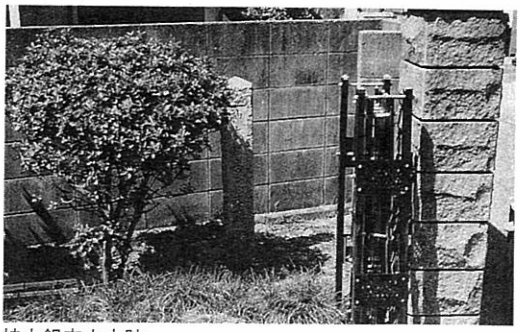

清水の池

神前

白地岩


神木銀杏之木跡

（二）道筋と現状

1　温品から小河原まで

（温品）

広島城下からの吉田道は中山の万休寺前を通り温品に入る。

この道は温品から馬木・福田・深川をへて吉田に至る道であり、天正十七年（一五八九）、毛利輝元が広島築城に先立つ物資輸送路として、その整備を命じた往還道である。

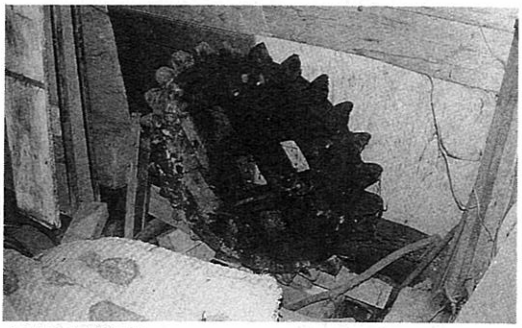
しばらくいくと砂原の三叉路に出る。この三叉路を左に折れる道の道路沿いはかつての温品の中心集落で、特に小出から神前にかけては商店もかなりあったという。温品郵便局付近には商業の神を祀る恵美須社もあった。県道上深川・広島線の開通・整備（大正三年開通）にともない往時の賑いはなくなり、今は商店も少ない。

温品郵便局の道路を隔てて向い側に温品村の氏神、清水谷神社の標柱がある。この辺りは神前（じんぜん）と呼ばれる。

清水谷神社の境内には後述する「清水の池」があり、その薬効が信仰の対象となり、お宮までの参道はかつて大正の初めころまでは「しろうと宿」、茶屋などが並び、県外よりの参拝客もかなりいたという。この参道沿い、八幡橋のたもとには大正十五年九月の水害を記念して建立された水害碑や、神木として信仰されていた銀杏の大木（明治十五年ころまで植わっていた）の記念碑である「神木銀杏之木跡」がある。

清水谷神社の境内にある「清水の池」は安永年間（一七七五～一七八一）の頃は、石で囲まれた滝壺は深さ二メートルで十畳ほどの大きさであったといわれているが、現在は滝の水量も減っており、池の部分には土砂が堆積し、ほとんど水が溜っていない。この池に向かって右手後方に、見上げるほどの大石があり、今にも落ちてきそうである。これが「白地（ばくち）岩」である。別名、矛地岩、博打岩ともいわれそれぞれ言い伝えがある。江戸時代末期、温品村の寺子屋は清水谷神社にあった。先生

井手の清水


水車の木製歯車

寺子門弟により建てられた墓

が神主で、弘化三年（一八四六）に亡くなったその人の墓が、寺子屋の門弟により建てられ、温品中学校の近くに今も残っている。

清水谷神社の参道をもとの道に戻る。しばらく行くと、温品公民館がある。ここは昭和三十一年まで、温品村役場があったところである。温品公民館の手前の道を右に折れるとすぐ右に、旧産業組合跡がある。温品における農業協同組合の前身である。昭和十年ころ創設され、正式には「保障責任温品村信用購売販売利用組合」という長い名称であった。事業内容は名称の通りであるが、店舗がないため、肥料や養鶏の飼料の購入は予約制をとり、道路脇に予約の品を配っていたという。現在は民家及び駐車場となっている。

温品公民館に隣接して温品小学校があるが、道路に近い校庭の西の端に「井手の清水」がある。この清水、昔は往還筋に面し、水涸れすることなく清水がわいていた。茶店もあり、旅人の喉も潤していたという。この清水は信仰の対象ともなっており、この清水を信仰して飲用するものは長寿を保つことができたという。大正のころまで生徒の飲み水や掃除用の水として使っていたと、二川久雄氏は記憶する。現在、清水は水が涸れ、土砂がたまっている。コンクリートのふたでおおわれ、鎖の垣で囲ってある。

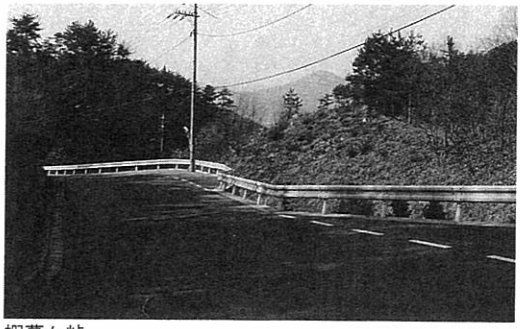
往還道が県道上深川・広島線と交叉する手前、左に温品小学校の前身、摂光舎跡がある。当時の手がかりとなるものは皆無で、今は民家が建っているが、広島の漢学者、松浦久米之丞氏を講師に、明治六年に創設されたこの小学校の校地面積は一二五坪、二年後には温品小学校の南に隣接する正光寺に移る。

往還道は県道上深川・広島線とおよそ一〇〇メートル重複し、広島方面に向かうが、再び分かれ、今度は山際の経路をとる。

字横見谷に竈神社(別名荒神社)がある。通路の神である猿田彦が祭神として祀ってあり、横見谷の南に隣接する矢田の大田大明神にも大田命と

水車の精米臼

馬木村の庄屋の墓


蝦蟇ケ峠

いう竈神社と同じ通路の神が祭祀されていることは、古代の山陽道がこの付近を通過していたことを想起させる。

山際の往還道、そのほとんどは林地ないしは耕地となり、その経路を辿ることはできない。

この付近、谷もやや狭まり、温品川の流れも速くなっている。

温品川では明治期、その流れを利用して、精米のための水車業が盛んであった。その最盛時、温品から馬木にかけて三〇余の水車が稼働していたという。記録に残っているものでも一九か所を数える。そのうち大きなものは臼一九基を備えていたといわれる。

明治二十七年、山陽線の開通により遠く京阪神地方から米が買い取られるようになり、精米業は衰退し、かわって綿くり用水車業が盛んとなったが、それも外国綿の輸入や大規模工場の進出により明治三十三年ころ衰退した。上温品三丁目の谷賢三氏宅には精米をおこなっていた水車小屋が、納屋となって現在も残っている。水車そのものは現存しないが、水車の大小二つの木製の歯車と地中に埋め込まれた臼が四つ残っている。また、川から引き込まれた水路には、まだかなりの勢いで水が流れている。

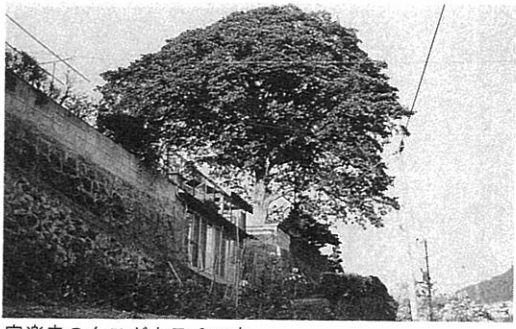
この谷氏宅の前の道を左に曲がると、菰口（こもぐち）から高陽町の矢口をつなぐ峠道となる。峠を蝦蟇（がま）ケ峠という。菰口には、こもぐち谷に住みついて多くの人を食べたけだものを、温品の殿様が神の助けをかりて退治するという話が残っている。けだものに食べられた人の墓を「千人塚」といい、二ケ城山の南麓にある数多くの石積みがそうであるという言い伝えがある。

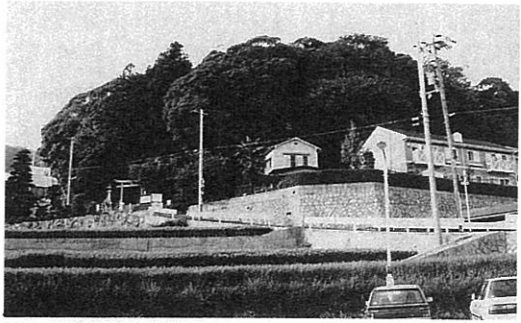
この「千人塚」についてはまた二ツ城陥落に際しての古戦場であって雑兵を葬ったものとの説もある。

（馬木）

さらに行くと温品川の峡隘部である惣の谷で、川は大きく蛇行する。

馬木分教室跡


安楽寺のクロガネモチの木


馬木八幡神社の社叢

ここは軍事上の要衝であり、左岸側に津村城跡、右岸側にはこれと対峙する形で尾上城跡がある。

惣の谷をすぎ相生橋を渡ると、すぐ右手の道端に十年前まで旧庄屋二反田利兵衛の墓があった。これは文政十三年（一八三〇）に亡くなった旧馬木村の庄屋の墓で、道路拡張のためもあって、現在は中井孝氏宅裏の墓地に移されている。墓石には馬木村の忽百姓がこれを建てた、とある。

相生橋から左手前方に大きなクロガネモチの木がある寺、安楽寺が見える。記録によると明治六年、この寺の一部を借りて福木小学校の前身である聊頼（りょうらい）社が発足したとある。

安楽寺のやや北寄りに福木小学校の馬木分教室跡がある。ここでは、明治二十六年から大正十二年まで、馬木地区の一、二年生が学んでいた。教師は一人、白壁二階建ての校舎であった。現在は畑地になっているが、道路から分教室跡にいたる石段は当時のものである。近所の人はこの場所を「学校屋敷」という。なお、福田分教室は福田寺条の西善寺にあり、名前を英育館といった。

下条あたりで温品川の右岸に出た往還道は、相生橋を渡ると左岸に転じ、やすらぎ丘団地の下を通って新直助橋を経て樋柴に至る。

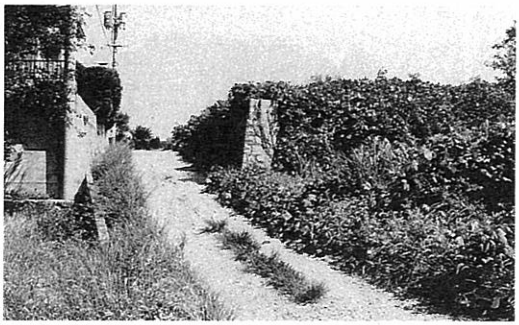
新直助橋から北に眼を転じると、黒々とした森の茂みが目に入る。馬木八幡神社の社叢である。周囲が人家や田畑であるため、ひときわ美しく見える。この社叢はシイを主とする常緑広葉樹林で、この地方の暖帯極相林の原形をほぼ保っている。ここにあるクロマツの大樹は貴重な存在である。往還道は新直助橋を渡るとすぐ右に曲がる。しばらく行くと県道に面した土井モータースの裏に出る。この土井モータース前付近が、ちょうど県道の峠にあたる（標高一七一メートル）。

これより先は小河原水系である。

ここにかつて「県道上の橋」があった。古老の話によると「当時の道は今より道幅が狭く、切り通しのような村道であった。道をはさんで東

県道上の橋があったところ

夫婦岩



二宮屋敷跡

と西の地区に住む人は農作業などでこの道を横切る時に不自由をしていた…。このため、大正四年頃この切り通しの上に広島の工兵第五大隊によって橋がつくられた。橋の幅は大八車が通れるくらい（一・五メートル）で、長さは四メートル余だった。橋の上は土で盛られ、橋の両側は草や芝等で敷きつめられて、その上に土が盛ってあった。この橋のお陰で、収穫物や薪を大八車で運ぶことができ、下の村道を通らずに楽に歩いて行けるようになっていたという。橋は一三年間かかっていた。」という。しかし現在、この付近は道の幅員も広げられ、その痕跡はない。

「県道上の橋」のあった場所から東方へ一〇〇メートルほど行くと、住還道に面して「二宮屋敷跡」がある。これは毛利氏の重臣であった二宮信濃守就辰の屋敷跡である。

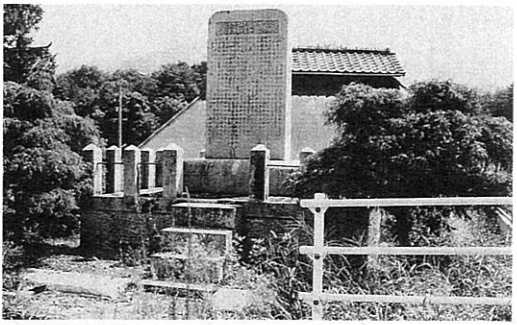
『芸藩通志』には「馬木村にありて毛利家人なり、此の地を二宮屋敷と称す、園地及び馬場跡とよぶ所あり」（巻七十四）とあるが、屋敷がどのように建てられていたかは不明である。

屋敷跡は小高い丘の上にあり雑草でおおわれ、石垣がわずかに残るのみであるが、その一辺は各々約四〇メートルと三〇メートルあり、角の石垣の高さは二、三メートルある。角の石垣の下の二段は当時のものといわれているが、上部の石垣はコンクリートで固められ、最上部はコンクリートブロックで囲まれている。

県道と往還道が合流するのは登石のバス停付近である。道は緩やかな下りとなる。さらに行くと右手に温品バイパスが見えはじめる。温品バイパスとの交叉点の手前、右手の水田の中に「夫婦岩」がある。この岩には「信心深い夫婦の狸が、村人への恩返しとして二つの大きな岩に変身し、大雨の水を二分して、一方を温品村に、また一方は福田村に流れる分水をつくり両村の水害を防いだ」という言い伝えがある。岩の一部は動かされているのではないかと思われる。

「夫婦岩」の近くは「光町翁記念碑」があったところである。この碑

大原演習場跡


光町翁記念碑

は旧福木村村長光町尽三郎（一八三八～一九一一）の功徳碑で、大正元年八月に建立されたものである。碑文には「上深川自リ福木ヲ経テ、廣島ニ達スル之里道ハ、溢窄磽かくニシテ行人久シク難ズ。乃チ改修ノ義ヲ建テ、沿道諸村ニ諮リ有司縣曾ニ請願ス。将ニ年ヲ期セズ竣工ス。」といったことなどの功徳が記されている。

この碑は現在は新しく拡幅がなった県道上深川・広島線沿いに面した福木電話交換局の向い側に移されている。石柱の囲いのある立派な碑である。記念碑前というバス停もある。

この碑の前から県道を横断し、しばらく行くと中国新聞福田販売所がある。その手前およそ一五メートルの歩道に面した縁石がわりのコンクリートブロック上に、今は見当たらないが、かつて「毒石」があった。この石は触れると腹痛を起こすという言い伝えからこの名がついたという。別名「くそ石」ともいう。昭和五十八年一月三日に郷土史家山田憲久氏が撮った写真によると高さ一メートル、三角形の赤黒い石の上に万十笠の形をした小さい平らな石がおいてある。

『芸藩通志』所載の福田村地図（文政年間）には「毒石」の記載があるが、位置がやや南にずれており同一のものかは不明。

温品バイパスとの交叉点付近より東の方、呉婆々宇山北東山麓部一帯、福木小学校から中国電力広島変電所にかけては、かつて陸軍の大原演習場（明治四十三年使用開始）があった。演習場ができる前はナシやブドウの果樹園がひろがっていた。そのことと関係があるのか「弘法大師とむしくい桃」の伝説が今も残る。

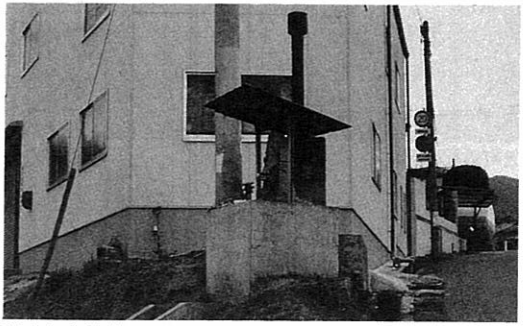
（福田）

往還道が福木小学校の東側付近を通過すると福田にはいる。このあたりかなりの急坂で道も曲がりくねっている。

往還道は小河原川沿いに続いている。しばらく行くと、かつての福田村の中心集落、山城にはいり、福木小学校（本校）の跡地の前に出る。現

旧福木村役場

福木小学校跡



移された地蔵

在は住宅地となっているが、明治二十四年から大正十二年までここに福木小学校があった。校地二四〇坪、わら屋根の校舎を四つに仕切り、教室とし、わずか四～五畝の運動場をはさんで職員室と宿直室の建物があった。ここは福田在住の一、二年生と福田及び馬木地区の三年生以上の生徒の学び舎であった。明治二十五年当時の在籍児童数は男子九七名、女子三五名であった。

福木小学校（本校）の跡地の前をすぎ、二つ目のかどを右に曲がると、旧福木村役場の跡地がある。ここは大正十一年に福木小学校が馬木畑河内に校舎を新築移転するとともに、役場も小学校下に庁舎を立てて移転するまでの役場所在地であった。なお、現在は空き地になっている。

さらに行くと若山酒店の前で、山陽自動車道のため往還道は生き止まりとなる。山陽自動車道に沿う新しい道をしばらく行くと道路の右端に地蔵がある。真新しいコンクリートの台座の上に地蔵がおかれている。以前はもっと山手にあったものが、観音原団地の造成のためにこの場所に移されたものと思われる。約五〇メートル前方にも新しく移されたと思われる地蔵がある。

山陽自動車道の広島東インターチェンジの北側では往還道は小河原川の南側を通っている。

寺分あたりで往還道は県道と重なるが、ちょうどその手前の道路に面した駐車場に自然石をそのまま利用した「訓導の記念碑」がある。これは明治四十二年に福木小学校に在職中、亡くなった中池太郎一の功徳を記念して寺分の有志が建立したものである。近所には彼の甥にあたる中池慶荘氏が存命中である。

福田の北部に位置する木ノ宗山（四一三メートル）は、その南東中腹の鳥帽子岩付近で発見された弥生時代の銅鐸銅剣および銅戈で有名であるが、その山頂には中世の山城跡があり、戦略上重要な拠点であったと思われる。『芸藩通志』には、「山頂にありて、上深川・中深川・福田・小川原

三田ケ峠

訓導の記念碑

わくくり岩

泣かずの池

村四村接界の地なり、吉川興経これを築き、いまだ移らずして死せりという。福田村所伝には、奥西仲綱といへり、是非を詳にせず」とあり、その城主は不明である。

木ノ宗山の南麓に黄播谷という谷がある。ここには妙法寺という、真言宗の寺があった（現在は廃寺）。この寺の境内の「泣かずの池」には、弘法大師の伝説があり、その池は今もある。

この辺り、小河原川は福田大川といわれる。『安芸町誌』には「昭和の初め、米その他の物資を輸送するのに大平から川船で大川（福田大川）を下っていったのを見た」という記載があるが、郷土史家山中敏善氏（元福木小学校長）はそれに対し否定的である。現在、御前橋から見ると、大平地区を流れる福田大川の水量はかなり少ない。

大平と中深川の奥迫を結ぶ峠道を、昔は可部往還道と称していた。その峠を三田ケ峠という。『芸藩通志』の地図には「ヌタガ峠」とある。ヌタは沼田の意味か。この峠には「わくくり岩」伝説がある。「わくくり岩」は峠を少し奥迫よりに下ったところにある。ちょうど峠の部分の福田から見て右の切り通しの上に小さな道祖神が祀ってあった。この道は現在、温品・福木地区と高陽ニュータウンとを結ぶアクセス道路であるため車の交通量は多い。

（小河原）

「深川温品道」である往還道が福田の五月ケ丘団地の北側を通過すると高陽町の小河原に入る。すぐに県道広島・中島線との交叉点に面して、明治の始め頃まであった「氏之原の石風呂」の跡がある。今は畑となっており、その様子はうかがえない。

ここで道は二手に分かれ、往還道は小河原川に沿って木ノ宗山のすぐふもとを通っている。

右手の道に入る。この道は地元の人が「かんどう」とよぶ鍋土峠、狩留家、さらには志和へとつながる古い道であり、「郡中国郡志」には狩留

ミノコージ峠を示す道

麻下橋の道標

家村道と記載され、毛利氏による広島から吉田に至る道路の整備に関連してつくられたものである。

途中、小河原川の支流麻下（まげ）川にかかる橋の西側のたもとに高さ五〇センチメートルほどの四角柱の少し傾いた道標がある。これは大正六年に付近に住む人が建てたもので、四つの側面にはそれぞれ廣島駅、可部、志和及び瀬野川駅までの里数が示されている。橋を渡るとすぐに右に折れ、麻下川沿いにのぼる道がある。これはミノコージ峠を越え瀬野川の立石に至る峠道である。

この道を使っての峠越えは今は時たまの登山者だけのようであるが、昔は伊勢参りの人たちが越していったとか、戦前は八本松の原演習場への往復に兵士が越えたり、小河原で牛を飼っていた人が、瀬野方面へ牛を売りにいくのに利用していたという（「福田いまむかし」）。

この道をしばらくいくと山陽自動車道小河原高架橋がある。その下を通り、およそ七〇〇メートル行くと道路の分岐点に差しかかる。そこに高さ三〇センチメートルほどのほぼ三角錐の形をした自然石の道標がある。文字はなく、ただ左の道を指さしている手が描かれている。それが示しているのがミノコージ峠への道である。

さて、元の往還道に戻る。木ノ宗山のすぐふもとを通る往還道は、ほぼ原形をとどめて川に沿っているが、しばらく行くと水田の中に消える。山代大丈夫氏によると往還道はこのあたりで川沿いの道と、木ノ宗山とそのふもとの比高五〇メートルほどの小山との間の小さな峠を越える道とに分かれていたという。この小山は片山と呼ばれ、ここには木ノ宗山城の出城である片山城があった。この二つの道は峠を越えるとふたたび一本道となるが、その手前、右手道路に面して大きな石碑がある。和泉屋幸太郎先生の碑とある。

碑文には幕末に小河原村の社倉役をしていたそのひとが私塾を開き、その門人たちに縁のある郷地区の有志がその学恩を記念して大正十年に

建てたとある。さらに行くと、県道広島・中島線と斜めに交叉する道路左手に面したところに畑が広がっている。ここはかつて小河原尋常小学校があったところである。住田橋を渡ると下深川に入る。

（和田　文雄）